

## 1. 教員および授業の概要

①教員名： 村山 誠 (Murayama Makoto)

②担当科目

博士前期課程：北東アジア専門講義 18 (企業戦略)、北東アジア研究指導 I～IV

③教員のプロフィール

- ・青山学院大学大学院法学研究科ビジネス法務専攻修士課程修了
- ・修士 (ビジネス法務)
- ・明治大学大学院商学研究科商学専攻博士後期課程修了
- ・博士 (商学)

④所属学会

日本経営システム学会、経営行動研究学会

⑤研究領域や関心をもっているテーマ

- ・従業員の活性化問題
- ・企業の経営システム
- ・不確実性下の意思決定問題

⑥研究指導方針

- ・研究テーマについてはできるだけ学生の意向を尊重する。
- ・学生自身が興味を持った研究テーマについて、学生自身で調査・分析した内容を中心に演習を展開する。

⑦指導可能な研究テーマ (あるいは過去 (現在) に指導した研究テーマ)

- ・商学／経営学全般
- ・特に、組織論と戦略論に関連した研究分野

## 2. 研究業績リスト

①著書

(1) 共著 「経営情報のネットワーク戦略と情報管理」 平成 26 年 10 月 同文館出版

②論文

(1) 「管理会計の現代的課題に対する一考察 ―京セラ アメーバ経営を中心として―」 単著 平成 17 年 3 月 明治大学大学院

(2) 「所得税法における経済的利益とポイントシステムの課税問題」 単著 平成 19 年 3 月

青山学院大学大学院法学研究科ビジネス法務専攻

- (3) 「アメーバ経営における局所最適化防止方策と部門別採算制度」単著 平成 25 年 9 月 明治大学大学院商学研究論集 第 39 号 P. 241～P. 261
- (4) 「日本の終身雇用システムにおける「未来志向的アメーバ経営」に関する研究」 共著 平成 25 年 10 月 明治大学社会科学研究所「総合研究」2013 年度前期研究成果報告論文集 P. 159～P. 172
- (5) 「大規模アメーバ組織としての SEIKO グループ」共著 平成 25 年 12 月 日本経営システム学会誌 Vol. 31, No. 2 P. 195～P. 200
- (6) 「組織メンバーの活性化問題における『支援-コントロール』フレームワークの研究」単著 平成 26 年 2 月 明治大学大学院商学研究論集 第 40 号 P. 75～P. 94
- (7) 「2 段階のエントロピーを統合した事業部制組織の経営資源配分モデル」共著 平成 26 年 3 月 明治大学「経営品質科学」研究所 2013 年度後期研究成果報告論文集 P. 167～P. 186
- (8) 「マトリクス型組織の経営資源配分問題における 2 方向の拡大推論モデル」単著 平成 26 年 9 月 明治大学大学院商学研究論集 第 41 号 P. 123～P. 144
- (9) 「3 段階の階層型ファジィ情報路モデル」単著 平成 27 年 2 月 明治大学大学院商学研究論集 第 42 号 P. 49～P. 67
- (10) 「重みつき多因子ファジィ情報路モデルにおける選択要因のウェイト推定問題」共著 平成 27 年 3 月 明治大学「経営品質科学」研究所 2014 年度後期研究成果報告論文集 P. 129～P. 145
- (11) 「情報のあいまいさとエントロピー・モデル」共著 平成 27 年 3 月 明治大学「経営品質科学」研究所 2014 年度後期研究成果報告論文集 P. 147～P. 155
- (12) 「ファジィ事象の確率を組み込んだ重みつき多因子ファジィ情報路モデル」単著 平成 27 年 9 月 明治大学大学院商学研究論集 第 43 号 P. 49～P. 69
- (13) 「KL 情報量最小化基準によるファジィ事象のメンバーシップ値推定モデル」共著 平成 27 年 11 月 日本経営システム学会誌 Vol. 32, No. 2 P. 123～P. 128
- (14) 「情報のあいまいさに焦点を当てた企業外部者の「拡大推論」分析モデルに関する研究」(博士学位論文) 単著 平成 28 年 3 月 明治大学大学院商学研究科商学専攻
- (15) 「日本における地方創生のための資源配分問題と重みつき 3 因子情報路モデル」共著 平成 29 年 3 月 明治大学商学論叢 99 巻 2 号 P. 43～P. 59
- (16) 「地名の都市名思考と県名思考に関するファジィ事象の確率とファジィ条件つき確率の結合モデル」共著 平成 30 年 7 月 日本経営システム学会誌 Vol. 35, No. 1 P. 1～P. 6

### 3. 学生に対するメッセージ

大学院では自ら主体的に研究へ取り込むことが求められます。そのためには、様々な事象に興味を持ち、その事象について探求していくという姿勢が重要になります。ぜひとも探求心を持って主体的かつ積極的に研究へ取り組むことを望みます。